

走れ！ ネコ先生

岸 武雄・さく◆斎藤博之・え



NDC 913

走れ！ ネコ先生

岸 武雄

学校図書 1982（昭和57年）

146P22cm（学図の新しい創作シリーズ）

学図の新しい創作シリーズ

走れ！ ネコ先生

発行 1982年3月30日第1刷

著者 岸 武雄

画家 斎藤博之

発行者 漆原利夫

発行所 学校図書株式会社

東京都品川区北品川1-1-14

電話(03)472-2741 〒140

振替東京8-72415

印刷所 図書印刷株式会社

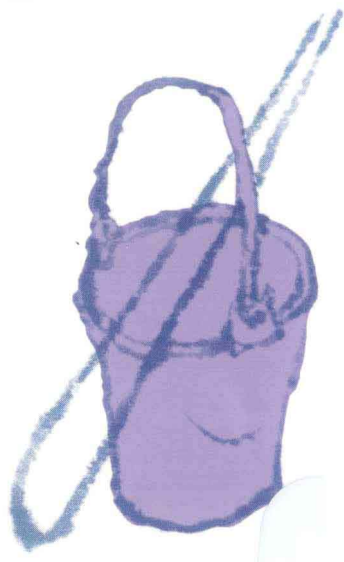
© Takeo Kishi, 1982

8393-361857-1038

落丁・乱丁本はお取替えいたします

走れ！ ネコ先生

岸 武雄・さく ◆ 斎藤博之・え



「がんばれ、ネコさ！
がんばれ、ネコさ！」

おれたちは、コーラスのように声をそろえ、ネコ先生を先頭にゴールへなだれこんだ。（一二〇ページ）







走れ！ネコ先生

もくじ

一	チコ先生のおめでた	9
---	-----------	---

二	「ネコさ」登場	25
---	---------	----



三 オババノシヤミセン……………33

四 わすれものの話……………45

五 ドンコチとアマゴ……………62

六 かぼちゃのつるが……………75

七 チコ先生からの手紙……………87

八 セイソウパトロール隊……………100

九 走れ、ネコさ！……………114

一〇 風花のとぶ日……………131

この本を読んでくださったあなたに……………144

一 チコ先生のおめでた

若くてスマートでお茶目で、すこしゴウインなどところのある、姉さんのような先生——、これが、おれたち四年三組の新しい受け持ち、チコ先生だ。

チコ先生は、この四月、となりの町の学校からかわってきた。始業式のはじまる前、校長先生の紹介があったあと、小馬のしっぽのようなかみの毛を、ふるんふるんとふりながら、きれいな声であいさつをした。

「大前田千夜子です。どうぞよろしく。」

はじめに、ひとつお願いがあります。わたしをよぶとき、『オオマエダ先生』と言うのは、やめてください。『オオマエダ』は長ったらしいし、それになんだかやくざの親分みたいで、わたしいやなの。（ここで、みんながくすくすわらった。）

また、『チャコ先生』も、舌をかみそうで言いにくいわねえ。だから、かんたんに『チコ先生』ってよんでちょうだい。わたしの身長は百五十一センチ、チビスケだか

ら『チコ』がにあうでしょ？」

先生はこれだけ言うと、いたずらっぽくにとわらった。でも、こんなあいさつは自分でもおかしいと思ったのか、左手でおでこをぽんとたたき、さっさと朝礼台からおりた。

「おもしろそうな先生やなあ。」

おれが、ならんでいるダイスケをつつくと、ダイスケは大きくうなずいた。

「うん、かつこええこと言うわ。へんに女くさいところがないし、だいいちお説教せつきょうをちつとも言わんところが、おら、気に入った。」

「ほんとや。チコ先生が、おらの組の受け持ちになるとええがなあ。」

「うん、そうや……しっ！ 校長先生がこつちをにらんだぞ。」

びっくりして目を正面に向けると、朝礼台の上には、また校長先生が胸むねをはって立っていた。

「では、これから新しい受け持ちの先生を發表します。」

と前おきして、紙切れを大声で読みはじめた。一年一組からはじまり、四年三組

になったので、耳をぴんと立て息を止めていると、

「大前田千夜子先生、いや、チコ先生。」

と、校長先生も少しわらいながら、いちだんと声をはずませた。

おれは、思わずダイスケの顔を見た。ねがいごとがこんなにみごとにかなうなんて、ゆめのような気がした。ダイスケも、目をむいてしばらくぼかんと口をあけていたが、とつぜん、

「やったア！」

と、ガッツポーズをしながら、うなるようにさげんだ。あたりの者がダイスケをふり向き、げらげらわらった。

こうして、チコ先生は、あつというまにおれたちの受け持ちになったのである。

思ったとおり、チコ先生はゆかいな先生だった。おれたちは学校へ行くのが楽しくて、カバンをふりふり、朝早くから出かけた。途中でチコ先生のすがたを見つけると、

「先生、おはよう、ちよっと待って！」

と、そばへ走っていった。先生の手には、女の子のだけれが、いつもぶらさがっていた。

四月、五月、六月と、かけ足で日はすぎ、もうすぐ夏休みをむかえようとする七月のある日のこと、おれは組の女の子たちが、チコ先生のうわさ話をささやき合っているのを耳にした。

——チコ先生のおめでたは、十月の半ばごろらしい。

「な、なに、チコ先生がどうしたんや？ おめでたって、ケツコンされるんか？」
おれが、胸むねをはずませて女の子の間にわりこんでいくと、のっぽのマユミが声をたててわらった。

「あほやなあ、テツやくんは……。チコ先生は、もうケツコンしているのよ。ケツコンしたから、名字がオオマエダになったんやないの。おめでたというのはね、赤ちゃんの生まれること！」

「へえー、おら、ちつとも知らなんだ。へえー、チコ先生がなあ……。」
びっくりして思わず大声を出すと、マユミはいよいよけいべつしたように、まゆを



しかめた。

「テツやくんは、今までチコ先生のおなかに、ちっとも気づかなんだの？ あきれたわねえ。六月ごろから、服もワンピースにかえられたやないの。……ほんとに、男の子って、どうしてそんなに鈍感どんかんなんやろ。」

「そう、いちいち、おれの言ったことばにひっかかるなよ。……それで、チコ先生は、もう学校をやめられるのか？」

「ううん、しばらく学校を休まれるだけよ。」

「ふうん、また出てこられるんやな。」

おれは、なんとなくほっとしたが、

「……でも、先生はたいへんや。ひと月ぐらいは休まんらんやろなあ。」

と、心配しながら言うのと、マユミは「は、は、は……」と男のようにわらいだした。

「なにがおかしい！」

「だって、テツやくんは鈍感どんかんなうえに、常識じょうしきがないもん。犬やねことちがい、女が子どもを生むのは、たいへんなのよ。サンゼン六週間、サンゴ八週間、まず二学期

「いっぱい休まれるわ。」

マユミは、なかなかくわしい。おばさんが中学校の先生をしていると言っていたが、そのせいかもしれない。

「へえー、すると、その長い間、おれたちは先生なしの自習か？」

「は、は、は……おかしくって、なみだが出るわ。……その間はね、サンキュウホジュウの、つまりチコ先生のかわりの先生がみえるのよ。」

マユミは、ますますむずかしいことばを使って説明する。

「ふーん、新しい先生が来るんか。……チコ先生のかわりとすると、ちびっこ先生か。」

「おかっぱ頭の、高校生のような先生かなあ。」

「さあ、それは……」

さすがそこまでは知らんとみえ、マユミはことばをにごした。

とにかく、たいへんなニュースだ。心配なような、ちよつと楽しみなような、へんな気持ちだ。おれは、じつとしておれんような気になり、なにも知らずに、ぼうつとして遊んでおる男の連中れんじゅうに、さっそくこのニュースをふれて歩いた。